２０１８年度　東京理科大学学位記・修了証書授与式 祝辞

学校法人東京理科大学を代表いたしまして、一言お祝いを述べさせていただきます。

本日、皆さんが多くの祝福のなかで、伝統と歴史ある東京理科大学の学位記・修了証書を手に巣立たれることを、心からお祝い申しあげます。

また、ご列席のご父母の皆様におかれましては、お子様が、無事、進級・卒業の厳格な“実力主義”の東京理科大学を、卒業・修了されたこと、さぞお喜びのこととお祝い申しあげます。

本日、卒業・修了を迎える皆さんが、この日を迎えることができたのは、今日まで見守ってこられた、ご両親、ご家族、そして学業を支えてこられた先生方や友人、その他、多くの関係者の方々のおかげであり、“感謝する気持ち”を忘れないでいただきたいと思います。

皆さんの門出にあたり、東京理科大の卒業生として、どのように生きてもらいたいか、本学の理事長として、また、数十年前に本学を卒業した先輩として、私の体験をお話しさせていただきます。

私が理工学部経営工学科に入学しましたのは、今から 51 年前、工学部の経営工学科が設置されて３年、理工学部が設置されて２年目で卒業生も出ておらず、私が卒業を迎えるころ、ようやく経営工学系の大学院が設置されるという時期でした。

私はあるビール会社に入社しましたが、私の３年生の春、４年生になろうとする頃に、本学に初めて、入社試験の推薦依頼がその会社から届きました。その年に入社した経営工学科出身者は、早稲田・慶応・理科大の３名で、当然、東京理科大学からは、私が初めて入社した訳です。

入社後は、関西の工場に配属されましたが、当時の東京理科大学は、物理学校以来の“実力主義”の伝統がありながらも、全ての業界で十分に認知されているとは言えない状況で、理学部を卒業された諸先輩方がいた、造船、重機械、情報産業などでは多少理解が深かったものの、食品業界では技術屋といえば、旧帝大の農学部が中心で、機械・電気の専門家として、旧帝大、東工大、私学といえば早慶出身者が少しいるといった状況でした。

そのような時代ですから、理科大に工学系の学部があることも、ましてや経営工学科の存在すら知られていない状況で、その年に、その工場に配属されたのは京都大学、

関学出身者と私の三人でしたので、関東の大学からは私一人という環境でした。

最初の１０年は、３つの工場の現場で過ごしましたが、作業が仕事という認識が強く、課題を見出し解決することが生産性向上、職場改革、改善に有効と思っていながらも、なかなか実行できず悶々とした時期がありました。

しかし、そんな時でも、大学時代に恩師から伺った話を思い出し、どんなことにも前向きに取り組みました。本日は、学生時代に恩師からいただいた教訓のうち、特に心に残っているものを紹介したいと思います。

一つ目は、“よく分かりもしないくせに分かったような顔をするな、考えて考え抜いても分からないことはある。分からないことが分かっただけでも進歩ではないか”。

また、“悩むことと考えることは違う。プラス思考を持ち、ポジティブにどうしたら出来るのか、何が出来るのかを考える。人に相談して得たアドバイスを、自分で取捨選択する。また別の角度から物事を考えてみる。仮説をつくり、それに基づき実行する。それが考えることだ”。

更に、“嫌な事実でもそれを捻じ曲げたり、見なかったことにして、ごまかして隠してしまってはいけない。皆が了解するからと、自分の心を改ざんしてもいけない。ごまかすくらいなら、いちいち説明したり、言い訳しないほうがいい。勇気と力をもって、真実を認めることが、真の人生を生きる唯一の方法だ。真実を受け入れ、それをしっかりと理解し、先にある可能性に向かって生きればいい”。

など、沢山の言葉・想いを授けていただきました。

特に、１０年の現場の体験後、ちょうど職場のリーダークラスになったころ、改善の仮説の積み上げが役に立ったのを覚えています。“仮説を立てて実行し、その結果を検証して、次の行動につなげる”という、まさに経営工学科での学びを実践したことが、私のキャリア形成に大きく貢献してくれました。

理科大でのゼミ、実験、実習等を通じ培われた課題発掘、課題発見、課題解決など、人には見えないことが見えるようになったのだと思います。これは、私だけではなく理科大生であれば共通して見えてくるものだと思っています。

その後も、私は大学時代の教えを胸に、愚直に職場の課題解決を楽しみながら実行しました。結果、先輩・同僚にも恵まれ、40 歳代で初の執行役員となり、その後、取締役になり、営業、生産部門以外、システムを含めた全ての管理部門を経験し、代表権のある取締役に就任し、最後は飲料会社の社長を務めました。

会社には、私の後にも理科大出身者が入社してきましたが、彼らと接していると、卒業した学部や学科は異なっても、厳しくも温かい指導を受けた同士として、一脈相通ずるものを感じました。それは、“理科大の DNA”とでも呼ぶべきものだと思います。

結果、その会社に昭和の内に入社した３人のうち２人が役員になりました。現在も、機械工学科と経営工学出身の執行役員が２名、ＭＯＴ出身者が取締役に就任しています。“理科大のＤＮＡ”はこの会社でも脈々と受け継がれています。

この“理科大のＤＮＡ”は、本学で教育を受けた皆さんにも確実に身についているはずです。皆さんはこれから研究者、ビジネスの世界へと羽ばたきますが、どんな境遇も自分に与えられたチャンスだとポジティブに捉え、挑戦してください。

本日、皆さんにお話ししたかったのは、この“理科大のＤＮＡ”です。

東京理科大学での学びを通じて、論理的な思考力を身につけた皆さんには、今後、自分の主体的な見方を確立する意味でも、必ず自分自身で、直接、事実確認を行い、正しい自己判断による生き方を貫いてもらいたいと思います。

人生は、山あり谷あり、評判が上がったり下がったりします。しかし、見る人は見ています。心ある人は必ずいます。そこに世間の善意や良識がひそんでいます。

また世間は冷たくもあり、温かくもあります。そういう柔軟な見方ができることが、人間の器を大きくしていくうえで重要なのです。

自他を問わず、悪い評判と事実を確認し、真実を見る目を養ってください。そして希望を失わず、謙虚に自分の道を歩んでください。日々の地道な積み重ねが、確実に皆さんの人間力を磨いてくれます。

自分は自分であり、自分以上になれない。自らを高く見せようとするのでなく、高めていくのです。自分自身の実力を積み重ねていって、明日の自分を今日の自分以上へと高めていく、その積み重ねが、品のある人間を作り上げます。

最後になりますが、皆さんには、東京理科大学で学んだことを誇りに、今後の人生を歩んでもらいたいと思います。理科大の卒業生として、決して下品にならず、品格のある生き方を意識して、今後も、一日一日を大切に過ごし、健康に恵まれ、心豊かな人生を送られんことを祈念して、私の祝辞といたします。

皆さんのこれからの大いなる成功・活躍を期待しております。

本日は、誠におめでとうございます。

二〇一九年 三月 十九日

学校法人 東京理科大学

理事長 本山 和夫